

日本語・日本語 教育を研究する

第19回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは「第二言語習得研究 - 学習者一人ひとりに注目する - 」です。

第二言語習得研究

学習者一人ひとりに注目する

津田塾大学助教授 林さと子

1. はじめに

学習者が言語を習得していく過程はさまざまです。教師がどれほど良い教材を準備し、教え方に工夫を凝らしても、結果は必ずしも教師が期待した通りではありません。教師は、「なぜ？」と疑問をいだきつつも、さらに教材に工夫を凝らしたり、新しい教え方を求めるたりすることが多いのではないのでしょうか。それはそれでとても重要なことなのですが、今回は、学習者一人ひとりの言語習得が「なぜ異なるのか」ということを、第二言語習得研究の視点から考えてみたいと思います。

2. 第二言語習得研究：学習者への注目

第二言語習得研究は、大きく二つに分けて考えることができます。一つは、言語の習得過程そのものに焦点を当てた研究で、もう一つは、学習者および言語習得にかかわる諸要因に焦点を当てた研究です。また、言語習得の共通の側面と、個々の学習者によって異なる側面に、それぞれ焦点を当てた研究と考えることもできます。

第二言語習得研究というと、学習者言語、中間言語の研究など、習得過程に焦点を当てたものを意味することのほうが多かったのですが、最近では、学習者に焦点を当てた研究の重要性も指摘されています (Breen 2001)。ここでは、学習者に焦点を当てた研究を参考に、言語習得の学習者による違いを考えてみたいと思います。

この分野の研究は、従来、個人差 (individual differences) の研究として行われてきました。年齢、適性、動機、性格といった要因と言語習得の成功との関係を、統計的な手法を用いて、量的に行う研究が主でした。学習ストラテジー、スタイル、ピラーフの研究も学習者に注目した研究と考えられます。この種の研究では、学習者へのインタビュー、アンケート、日記など、学習者の自己申告や内省をデータとする方法が多く用いられています。また、近年、密な観察を行い、詳しく記述する手法、エスノグラフィーを用いた質的な研究も行われるようになってきています。

3. 第二言語習得にかかわる諸要因

第二言語習得の過程には、数多くの要因が、複雑にかかわっていると言われていています。(Ellis 1994、Brown 2000)。次ページ図1は、第二言語習得にかかわると考えられる要因を「社会文化的要因」「学習者要因」「学習環境要因」の3つの要因群に分けて、習得過程にかかわっていると思われる様子を示したものです。この図は、学習者の特性も、学習環境も社会的なコンテキスト・状況の中にあって、社会文化的な要因の影響を受け、なおかつ学習者特性と学習環境も相互に作用しながら習得過程に影響を及ぼしているのではないかと示しています (林他 1998)。

4. 学習者Mさんの場合

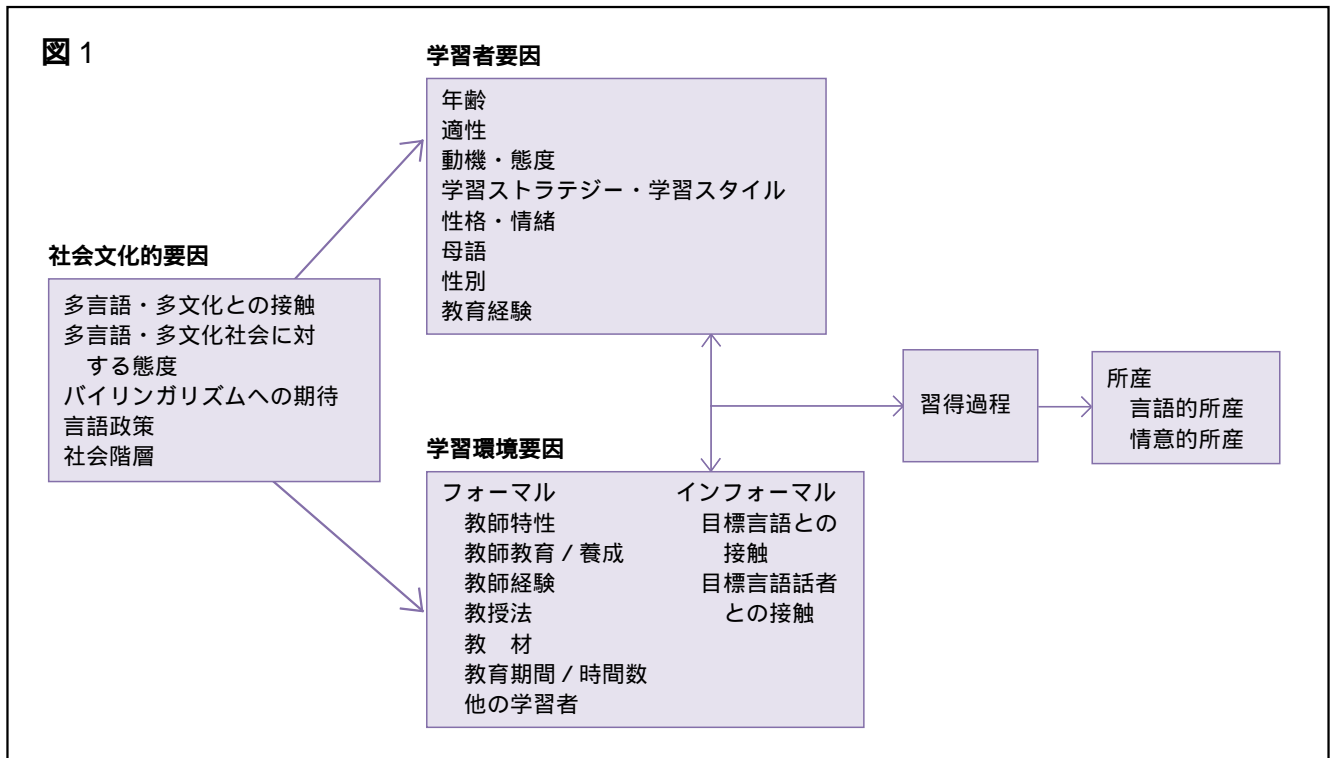
学習者一人ひとりの習得過程にかかわる諸要因とその相互作用を見ていくと、言語の習得は一人ひとり異なるとは当然ではないかとも思えてきます。日本語教育においても、学習者一人ひとりをできるだけ多方面からとらえる試みが紹介されています (池上、関、八田、八木 2000)。

事例

海外で日本語を学ぶ高校生のMさんは、テレビで見る日本のアニメやドラマに熱中し、流行のキャラクター商品などを愛用しているのですが、日本語の授業となると、それほど熱心な学習者というわけではありません。授業中は、ぼんやりとしていることが多く、参加度が低いMさんに教師はとまどっています。

この学習者Mさんは、日本の文化や社会への関心があるということで 統合的動機 はあるものの、高校生という年齢では、将来の進路や専門に向けて真剣に頑張ろうという 道具的動機 は持っていないと思われる。また、実際に日本へ行く機会があるかどうかもわか

図 1



らず、日常的に日本人との接触があるわけでもない 学習環境 で学んでいるわけです。学校の単位や入試は 外発的動機 ではあっても、日本への興味・関心から学習 自体がおもしろく、楽しいというような 内発的動機 とはなっていないようです。授業中の様子だけから見ると、Mさんは動機が弱い学習者に見えてしまうかもしれませんが、教室外で、自分で積極的に日本の情報を集めているMさんを肯定的にとらえると、対応の仕方が少し見えてくるのではないのでしょうか。海外の中等教育の学習者として、ひとくくりにとらえるのではなく、一人の学習者Mさんを多角的に見る必要がありそうです。

Mさんが興味を持つような素材を教材に取り入れるなどの工夫や、日本の若者文化について母語で話し合ってみるといった活動を試みると、教室での日本語学習が日本の文化や社会への関心と結びつき、学習への取り組み方も変わってくるのではないかと思います。学習者をよく観察することによって、また、学習者とのやりとりから、授業の工夫も生まれてくるのではないのでしょうか。

5. まとめ

異なる条件を持った学習者が、異なる環境下で学んでいます。

Every learner is unique.

Every teacher is unique.

Every learner-teacher interaction is unique.

(Brown 2000)

「学習者は一人ひとり異なり、教師もまた一人ひとり

異なります。そして、学習者と教師のやりとりもそれぞれ異なっている」のです。このことを念頭に、学習者と丁寧に向き合うことは、授業を見つめ直すよい機会となりそうです。そして、そこでの発見は、現場の教師にこそできる研究であるとも言えるでしょう。

参考文献

- Breen, M.P. 2001. Learner Contributions To Language Learning: New Directions in Research. Longman
- Brown, H.D. 2000. Principles of Language Learning and Teaching(4th ed.). Longman
- Ellis, R. 1994. The Study of Second Language Acquisition. Oxford Univ. Press
- Skehan, P. 1989. Individual Differences in Second-Language Learning. Edward Arnold
- 池上・関・八田・八木(2000)「授業のあとの講師室 - 日本語学習タテヨコナメ - (第5回)」『月刊日本語』連載(2000年4月~2001年3月)アルク
- 林さと子他(1998)『第二言語としての日本語学習および英語学習の個別性要因に関する基礎的研究』平成8~9年度科学研究費補助金研究報告書
- J A C E T S L A 研究会編著(2000)『S L A 研究と外国語教育 - 文献紹介 - 』リ - ベル出版
- K・ジョンソン・H・ジョンソン編/岡秀夫監訳(1999)『外国語教育学大辞典』大修館書店